

# 1 自己評価及び外部評価結果

## 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4390101568		
法人名	株式会社 かいごのみらい		
事業所名	グループホーム泉ヶ丘		
所在地	熊本市東区南町16-8		
自己評価作成日	令和6年3月15日	評価結果市町村受理日	令和6年5月31日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/32/51070.html">https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/32/51070.html</a>
----------	---

## 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構		
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205		
訪問調査日	令和6年3月26日		

## 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

令和5年度は「Withコロナへの転換～心も身体もイキイキを取り戻そう」という当ホームの事業目標を掲げ、長いコロナ禍がもたらした認知症高齢者の社会性の衰えによる人や社会とのつながりが減っていくことの弊害に着目し、高齢者施設としての感染対策は継続しつつ、心も身体もイキイキを取り戻すための社会的支援に新しく取り組んだ1年でした。その大きな柱となる支援が「社会参加」であり、傾聴ボランティアの受け入れ、くまモンへの来訪依頼、家族会の再開、対面での面会緩和等を行う中で、明らかに入所者皆様の笑顔を目にする機会が増え、社会参加の意義を実感いたしました。一方で、テラスに花いっぱい運動や音楽のある暮らしの継続など、居心地の良い環境作りも意識して取り組みました。このような社会参加をする中でも、今年度は新型コロナやインフルエンザを入所者、職員共に一人も出すことはなく、感染対策の意識の高さは自負するところでもあります。

## 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

令和5年度はコロナ感染予防対策を徹底したことで、感染も無く過した1年であり、「Withコロナへの転換～心も身体もイキイキを取り戻そう」を目標にベクトルを同じくして臨み、穏やかな日常に加え、くまモンの来訪(長寿の祝い)、ボランティアの訪問、8周年のお祝いには入居者のできる力の発揮(玄関の生け花、作品作り・挨拶係等)、入居者が神輿を担いだ夏祭り等の非日常は入居者の今「瞬間」の楽しみや笑顔を引き出し、107歳を筆頭に高齢化傾向にあっても出来る事を見出す職員の姿勢に敬意を表したい。これまで築き上げてきた地域との関係性は息つき、ブログによる日常生活を発信し、家族会の再開による意見交換や家族の苦言から公表する運営推進会議等透明性のある運営体制である。管理者を中心として職員との合議が入居者へのケア向上等に反映され、ホームでの”にこにこカフェ”や、市主催の商店街でのお茶会等が認知症の人の理解や啓発の一環として生かされており、今後も認知症ケア啓発への寄与に大いに期待したいホームである。

## V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

### 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I.理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	毎朝、朝礼後に勤務者全員で理念を唱和し、休憩室やトイレ等、目にとまる場所にも掲示している。また今年度は職員会議内で、理念①に掲げる「ほっとできる心地よい空間づくり」について協議し、理念の実践に向けて次年度の事業計画に組み込む予定である。	“ほっとできる心地よい空間作りや、一人ひとりの尊厳を大切にすること、自由で自分らしくいられる否定しない介護”を理念として心地よい空間作りについて話し合う他、アフターコロナとなり、3年間で認知症の進行や身体的な低下に繋がったとして、その分を取り戻すべく外との繋がりを復活されたいと外部との交流に努めている。“With コロナへの転換～心も身体もいきいきを取り戻そう”を5年度の目標として全員がベクトルを同じくするホームである。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	自治会や老人会の活動には感染対策のため未だ人数制限があり参加できていないが、自治会に加入し、地域住民との友好的な関わりは継続している。玄関前には近隣の方が盆栽を置き、草むしりをしてくださるなど感謝に耐えない思いである。	地域に根ざすための努力を惜しまないホームでは、これまで築き上げてきた近隣との友好的な関わりが継続され、ホームで開催する“ここにココフェ”も再スタートし入居者・家族と・地域住民との交流促進に努めている。更に、商店街の商店を活用したお茶会(福祉課の企画)や近くのクリニックに訪問する飾り馬の見学、ハーモニカ・傾聴ボランティアの訪問等住民との交流する機会を多岐にわたる等入居者が地域の中で当たり前暮らすことを支援している。	自治会や老人会にはまだ人数制限があるため、参加は控えている状況との事である。人数制限が緩和された場合にはホームからも参加する事で認知症ケア推進の一環やホームでの認知症カフェ参加に繋がることと大いに期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	8月より認知症カフェを4年ぶりに再開した。まずは入居者家族を対象にスタートさせたが、今後は地域住民の方にもお声掛けをする予定である。12月には施設周辺にクリスマスイルミネーションを点灯し、癒しの場を提供した。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	今年度より、対面での会議を行っている。会議の中で防災について意見交換をし、道順なども含め次年度は自治会との合同訓練を取り入れることにした。また誤薬事故が続いた時には、薬包に色を付けてはとのアイデアを受け、現在実施中である。	多くの資料を基に質疑応答や意見交換が行われている。入居者状況や勤務体制、感染対策、活動にも注視してほしいとして写真を載せて説明している。また、ヒヤリ・ハットを記す目的を説明等も説明するとともに事故及び苦情等分析した結果を載せる等透明性のある運営体制である。この事例報告が参加者からの提案に繋がりがケア向上へと反映させる等運営推進会議の意義が発揮されている。更に、地域の理解を深め、防災面での協力体制等に繋げている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	2ヶ月毎の認知症カフェ連絡会に参加し、福祉課との関わりを持っている。福祉課より紹介を受けた傾聴ボランティアも月に2回2名ずつ受け入れを行い、健軍商店街でのお茶会の提案やハーモニカボランティアの派遣も受け、市の事業を活用する中で協力関係を継続している。	認知症カフェ連絡協議会に参加しての意見交換会や、福祉課が企画するお茶会への参加やハーモニカボランティアや傾聴ボランティアの紹介、研修会や講演時等足を運び情報交換等を行う等行政等との協力関係を築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束ゼロを目指し、すべての職員が取り組んでいる。現在、転倒リスクの高い方の立ち上がりを見逃さないように離床センサーを4名の方に使用しているが、身体拘束適正化委員会でも事例として取り上げ、センサー使用が適正であるか協議しながらケアを行っている。	身体拘束ゼロ宣言・高齢者虐待ゼロ宣言を掲げたホームでは運営推進会議の中で1回、3回は職員との検討会を開催する等超高齢化傾向や介護度も上がり具体的な事例を挙げた話し合いや、グループワークによる研修等繰り返しの勉強会などにより意識を強化している。センサー使用にはプランに組み入れ、家族の納得と同意を得て使用している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	施設内に「高齢者虐待ゼロ宣言」を掲示し、職員への意識啓発を行っている。また、虐待防止委員会を設置し、年1回の研修を行い、全職員の意識向上を図っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	12月に親族以外の成年後見人をつけた方の入居があり、権利擁護についてとても身近に感じている。その事例を成年後見人について学ぶきっかけとしたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には一つ一つ説明、確認をとりながら行っているが、今回、入院療養の継続が必要な入所者家族と度々話し合いを持ち、入院継続の理解は得られているものの、どうしても退所には納得してもらえず、苦情を受けたケースを経験した。それ以降、契約時の説明の中でもとくに解約についてはトラブルになりかねないのでさらに十分な説明を行うように努めた。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	今年度より家族会活動を再開し、年に2度の総会を開催した。また運営推進会議には、毎回一家族に参加をお願いし、意見・要望を発信できる場を設けている。また、苦情も今年度2件受け付け、同会議内で開示している。	入居者からは日々の生活の中で聞き取りしている。家族からは訪問時に状況を報告し意見や要望等を収集しており入居者のケアに対する要望が上がり、家族からの食事メニュー表を載せて欲しいとする声に各ユニット壁面に掲示している。運営推進会議や家族会総会を問題提起の場とし、苦情については職員と精査するとともに運営推進会議の中で開示している。“泉ヶ丘通信”やブログ等を通じて情報を発信し、8周年のお祝いには最高齢107歳も挨拶係としての活躍の場もあり、家族会とタイアップして盛大に開催している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	業務内容の変更や次年度の事業計画等、職員会議内で職員との意見交換を行い実施するようにしている。また変更点についても後日、見直しの機会を設け、現場の声を反映した働きやすいものとなるよう努めている。	毎月のスタッフ会議の中での意見会議の中で職員が理解して業務にあたって欲しいと合議により決定し、次月に更に現場を声を取り入れながら評価する体制としている。残業の無いシフト作りや業務内容の見直し等同系列のグループホームの体制作りも聞きながらのホームの特徴を捉えた体制としている。本部・各グループホーム管理者との運営会議により待遇面や福利厚生を見直し、職員の働きやすい環境作りに努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	個別に職員との会話の機会を持ち、職員の目標や家族環境など知ることができよう努めた。また休みの希望や職場環境・条件への希望には応えるようにしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員が積極的に外部研修に参加しやすいように費用の一部負担を行っており、現在、全職員が何らかの介護資格や介護研修を終えている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	ささえりあ江津湖様による東4圏医療機関・サービス事業所連携協議会に参加し、同業者の方との交流や学びの場としている。また、認知症カフェを再開するにあたり、他事業所のカフェにも参加させていただいた。		
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所前の面談では、本人と直接話をする機会をもち、本人の言葉に耳を傾けるよう努め、笑顔を引き出しながら安心して本音を語れるような面談を心がけている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	施設見学の段階から時間をかけ、ご家族の思いに向き合い、入所希望の有無を問わず認知症ケアのプロとして相談対応を行ってきた。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	ご要望により、訪問マッサージやころんだらネットワークへの登録、歯科受診など必要に応じて他のサービスの利用も可能である旨ご説明し、ご希望があれば入所後すぐに対応できるよう入所時のプランに反映させている。また入所プランは支援の見極めのため1ヶ月の短期プランとしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員はご本人と馴染みの関係を築けるよう努め、ご本人の自分らしさを大切にしたり関わりを大切にしている。また日々の支援以外にも、入所者様には受け持ち職員をつけることで関わりを幅を持たせている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	毎月、職員からご家族へ写真付きのお手紙を送付し、ホームでのご様子や本人の言葉をお伝えしている。また、ご家族の来訪時には必ず近況報告を行い、共に支え合う協力体制をとっている。今年度より家族会総会も再開し、意見交換の場、家族間交流の場としている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	現在、面会は対面で行い、15分間ではあるが家族や知人との大切な時間を過ごしていただいている。また、ご家族より幼少期のアルバムや思い出の写真などをお預かりし、ホームでもご本人が思い出を振り返る時間を設けたりしている。とくに終末期には、生家への往訪や墓参りなど、本人の希望が実現可能となるよう支援を行っている。	家族や知人の訪問、墓参、超高齢化した姉妹での入居、昔を思い出して欲しいと中学1年の英語を掲示するとともに机の上には英語の文章を置いたり、職歴から年頭にあたり「平和の為に働きます」としたためヘリコプター等居室に飾る等馴染みの関係性を継続して支援している。入居者には心残り無く過して貰いたいとして家族の協力も得て、動けるタイミングを見計らいながら我が家に出かけ墓参りを実現させる等“今できることに注視しながら支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	ご本人の状態や相性などを考慮し、食事席の配置をしたり、ユニット間の交流も取り入れられている。集団に入れない方には職員が個別に関与し、孤立することのないよう心がけている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院退所された方や看取り退所となったご家族からのご相談等には誠意をもって対応、支援するよう努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	業務優先とならずに寄り添う時間を持つことを大切にしている。ご本人の訴えや言動、生活歴等から見えてくる個々の思いを汲み取り、カンファレンスで職員間の情報共有し、当法人の掲げる「思いや意向へのこだわり」をもった関わりができるよう職員一同努めている。	入居者の行動にはその方の意味や目的があるとして、職員は寄り添う時間を大切にしながら、会話の中に思い等のヒント等を把握し、カンファレンスで情報を共有する等、まずは“知る”ことに焦点を当てている。入居者の立ち上がりや動きにも目的があつてのこそとして捉えている。入居者の中には“して欲しいことや、外に行きたい、実家に帰りたい”等直接の申し出もあるが、自分から発信されない方や意思疎通の難しい方等もあり、言葉では難しい場合でも相づち、うなづきや行動等を意思表示として捉えながら本人本位の生活を支援している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	当法人の掲げる「これまでの暮らしへのこだわり」を持ち、入所前の面談や入所後の担当者会議等の中で、家族よりしっかり聞き取りを行い、ケアプランに活かすようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	当法人の掲げる「できることやわかることへのこだわり」を持ち、自立支援、残存機能の維持に力を入れ支援している。カンファレンスでも職員間の情報共有を行いながら現状の把握に努めている。		
26	10	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケアマネージャーだけでなく、職員もモニタリングに加わり、カンファレンスもケアプランを確認しながら行うことでケアの統一を図っている。また、ご家族だけでなく、主治医、薬剤師、訪問マッサージの担当者や看取り期には訪問看護等との意見交換も行っている。	本人・家族の希望を基に当初は本人を知る期間として短めに作成し、新たに当た情報（家族や職員等）を生かしたプランを作成している。家族の思いであるホームで楽しんで欲しい等の意向をプラン化している。毎月のカンファレンス、モニタリングや家族・ケアマネージャー・ホーム長等による担当者会議等全員が関わり、区分変更や入居者個々の状態により見直している。看取り期には、アセスメントから取り直し、医療や訪問看護・職員等がチームとしての関わりと、不安の無い一日を過して貰うとしてこまめな声かけ、不安無く過す事等具体的且つ個別的なプランである。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別記録は電子記録のため、迅速な情報共有ができています。ただしタブレットやPC操作が苦手な職員も多く、記録内容の単純化が課題であったが、業務日誌を電子記録より抜粋する形に変更したところ、記録内容にも個別化が図れるようになってきている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	土地勘があり離設リスクのある入所者に対し、外に出さない支援だけでなく、思い出の場所巡りなどの支援も継続して行っている。また、当法人内では初めての事例であるが、特定の職員からの被害妄想に苦しんでいた入所者に対し、「転所」を行うことで上手くいった経験をした。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ5類移行を機に、福祉課の協力を得て、傾聴ボランティアの受け入れを行っている(1回に2名、月2回)。ボランティアの方によるハモニカ演奏会や歌謡ショーなども行った。また、民生委員様より東野中の生徒さんから入居者様への絵手紙をいただき、手紙交換なども行った。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	家族の同意を得て、協力医をかかりつけ医とし訪問診療を受けている。24時間相談電話を設けられ、安心感のある医療が受けられている。また、家族の希望があれば歯科の訪問による定期的な口腔ケアを受けることもできている。専門医受診の際には、職員も同行し受診支援した。	本人・家族の意向に沿い、現在2か所の医療機関により2週間に1度の訪問診療が行われている。受診結果で異常や薬の変更など何かあれば、管理者や看護職員から家族へ報告されている。専門医の受診は家族と、生活の様子を正しく伝えられるよう看護職員が同行している。歯科は2か所の医療機関による訪問診療で希望者への治療が行われている。入れ歯の消毒で夜間就寝時に外したがらない方には、日中に行われている。	毎食後の口腔ケアはブラシの使い分け(歯間・舌・スポンジ)やお茶うがいなど誤嚥性肺炎防止にもつながる事から力を入れており、家族からも日頃の口腔ケアへの要望(歯間ブラシ使用など)が出されている。継続した取組に期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	各ユニットに1名の看護師を配置し、またホーム長も看護師であるため、介護職の気づきや疑問には看護師がわかりやすく丁寧に説明、指示を行っている(交換ノートも活用)。医療行為が必要になった場合には、外部訪問看護を入れ、協働体制をとっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院が必要な場合は家族の希望に沿う形で主治医が入院先を決定している。入院中は、病院の相談員との情報交換、退院計画を話し合いながら、早期退院となるよう支援している。また退院時カンファレンスにも参加し、退院後も安心して生活を送れるよう各所連携をとっている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入所時に、重度化した場合の医療連携体制指針について説明し、その時点での看取りや救急搬送についての家族の意向は概ね把握している。終末期になれば、本人や家族の思いに向き合いながら、その人らしい看取りプランを計画実施して。看取りの研修会もあわせて開催した。	入居時に重度化した場合の医療連携体制や指針について説明し、その時点で概ね確認している。家族には必要に応じて改めて終末期について話し合いを行っている。重度化・終末期支援に関する研修会の開催や、ホームの方針を共有し支援に努めており、今年度は2名の看取り支援が行われている。ホームでは今しかないというタイミングをみて、一度自宅に帰る機会や墓参、仏壇参りなど家族の協力を得て、可能な支援が行われている。	管理者は今しかないタイミングでの帰省などが、終末期ではなくそれ以前にそのような支援が出来ればと、日頃の大切さについて語っている。ホームでの最終を望まれている方もおられ、今後も入居者、家族の思いに応える支援に期待したい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	昨年度は心臓マッサージ、AEDの使用訓練を行ったので、今年度は嚔下状態が悪い入居者への窒息時の緊急対応として、背部叩打法、ハイムリック法、呼吸停止した場合の心臓マッサージなどの研修会を5月に行った。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に2回の防災訓練を実施した。自治会ではまだ集合人数の制限があるとのことで、地域住民の参加は見合わせた。専門業者の指導を受けながら昼間、夜間を想定し避難、通報、消火訓練を行った。課題であった防災巡視時のチェック項目表も確認のポイントを追加し整備も行った。	防災訓練として年2回の実施し、訓練後の課題として、落ち着いた確に火元を伝える事、初期消火に時間がかかり火災が発生場所が確認が出来ていない、部屋の確認に時間を要したなどが出されている。運営推進会議の中で、防災訓練について検討されており、校区での訓練が大切であるという参加者(地域代表者)からの意見が出されている。職員は校区からの勤務者はおらず、避難所がわかるか不安であり、道順なども含め次年度は自治会との合同防災訓練を行いたいとしている。BCPについては策定が済みであり、備蓄も防災、感染症用で確保されている。	運営推進会議の中でも地域代表者による心強い意見が出されており、自治会との合同防災訓練の実現が期待される。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入所者への呼称は基本、さん付けで行っているが、入所前に携わっていた職業の役職名(先生、参与、婦長など)でお呼びすると良い反応が返ってくることも多い。広報誌やブログへの写真や名前の掲載については入所前に家族に確認をとり、プライバシー順守を配慮している。	「人生の大先輩である年長者一人一人の尊厳を大切にすること」を理念に掲げ、自由で自分らしくいられるよう、職員はゆっくりと関わる事を大切にしている。ホームでは広報誌やブログへの写真掲載などが行われており、家族に確認し同意のもと使用されている。毎朝の整容や入浴後の整髪を支援し、髪の毛のカットは訪問理美容で対応している。また、化粧品やシャンプーなども愛用の品など家族に確認しながら継続して使用できるように努めている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	着たい服を選んでいただいたり、水分提供の際には飲物の希望もお尋ねして提供するようにしている。意思表示ができない方も、提供したもののへの反応を見ながら、思いを汲み取れるように努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	無理強いすることなく、その時々の入所者の思いやペースを尊重し、入所者ファーストで希望にそった支援を心がけている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	毎朝の整容や洗髪後の髪の設定、自宅にいた時と同じように肌のお手入れをするための化粧品を用意したり、シャンプーやトリートメントにいたるまで愛用品があれば使用するようこだわっている。家族の要望がなくても、肌の弱い方の入浴の際は泡で洗浄・洗髪を行うなど個別対応も心がけている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事は調理専任者が入所者の好みや指定形態にも対応し、手作りしている。イベント時にはおやつバイキングを用意して好きなお菓子を選ぶ楽しみも味わっていただいている。今年度は干し柿だけでなく、海苔巻き作りなども企画し作った料理を振舞う喜びも味わっていただいた。また家族から献立表の掲示の要望があり、各ユニットに今日の献立を掲示し、食事前にもメニューを発表することで、食の話題が広がった。	専任者を中心に調理されており、食材は主に専門店などから配達されている。食事形態は嚥下力に応じてミキサー食や粥も準備しており、自力で食べる方や必要に応じて介助されている。ユニットごとに献立表の掲示や食前のメニュー紹介でワクワク感を持ってもらえるようにしている。行事食やイベント食などは特に楽しみにされており、巻きずしを巻いたり、干し柿づくりなど季節の楽しみを一緒に取り組んでいる。検食は現在取り組まれていないが、この4月からは導入したいとしている。	検討されている検食については、入居者の代弁者として職員の気づきなどが今後活かされていくことが期待される。料理の匂いは更に食の楽しみや職員、入居者同士での話題にもつながると思われる。カレーの調理の際は、辛さは控えなければいけないと思われるが、食欲に繋がるような香りについてはもう少し取り入れても良いと思われた。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量は毎食チェックをしている。また嚥下状態に応じて個別にミキサー食や刻み食、おかゆなど提供し、安全な経口摂取を心がけている。白内障の方には色のついた食器を、全盲の方には取っ手の付いた食器を使用し、可能な限り自力での摂取をめざしている。飲水量の少ない方には飲水量チェック表を用意し、職員への意識づけも行っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	誤嚥性肺炎防止の意味もあり、毎食後の口腔ケアは歯間ブラシや舌ブラシ、スポンジブラシなどを使用し、お茶うがいも含め力を入れている。入所者によっては訪問歯科による定期ケアも受けており、月1回の口腔ケア勉強会も開催している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	可能な限り、布パンツの着用を継続している。現在7名が布パンツ使用しているがそのうち2名は入所後に紙から布に変更している。尿意の訴えがなく、紙パンツを使用している方も日中は食前食後など排泄のタイミングを見計らい、トイレ誘導し、自尿の排泄を促している。また夜間頻尿で睡眠の妨げとなるケースには夜間のみポータブルトイレを使用している。	排泄は自立した方や、必要に応じた声掛け、誘導など個々に応じた排泄支援に努めている。可能な限り布パンツの着用に努めており、入居後、自立に向けた支援によりリハビリパンツから布へ変更等職員間の連携による個別支援の充実が窺える。夜間は安眠を重視してポータブルトイレを使用される方もおられ、清潔に管理し臭気など籠もらないようにしている。また、トイレ内も職員は汚れや流し忘れなどが無いよう、小まめに確認している姿が見られた。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘薬はほとんどの方が内服されているが、毎朝のヤクルトや食材にごぼうや糸こんにゃくを取り入れ、自然排便につながるよう試みている。便秘になると認知症のBPSD悪化する方や排便の仕方がわからない方もいらっしゃるため、支援するうえで大変身近な問題と感じている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	業務の都合により、週2-3回、午後からの入浴支援を行っている。機械浴導入後は要介護度が高い方も安全な入浴が可能となった。長風呂を楽しむ方がいらっしゃるが、のぼせ防止のため入浴前にしっかり水分をとっていただいたり、入浴中の顔色にも注意し、邪魔にならない場所で見守り支援を行っている。	午後からの入浴を週2~3回支援している。機械浴の導入により介護度が高い方も安全にゆっくりと入浴を楽しんでもらえており、自立で入る方にはプライバシーに配慮して職員が見守り支援に努めている。シャンプー類はホームで備えているが、好みや使い慣れた品を準備される方もおられる。季節湯(菖蒲・柚子)の支援は継続して取り組んでおり、5日間実施する事で全員が楽しめるようにしている。更に入浴の前後には、水分補給としてスポーツ飲料などを準備している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	睡眠導入剤の使用者は数名のみ。日中の短時間の午睡や体を動かすレクリエーション等で安眠につながるよう対応している。夜間頻尿で睡眠の妨げとなっているケースには夜間のみポータブルトイレを使用している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬局からの薬剤管理指導報告書にも目を通し、薬剤師や施設看護師からも助言や指導を受けている。服薬ミス防止のため複数人でのWチェックを行い、飲み込むまでの確認を行っているが、それでも誤薬は数件あっており、さらに薬包に色で印をつけたり、カレンダーに書き込んだり等繰り返しの工夫を行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	廊下のカーテン開閉、洗濯物干し、花の水やり、少量の晩酌等をご自身の日課として楽しんでいる方もいる。散歩好きな方には万歩計を持って室内を歩いてもらったり、徘徊にも可能な限り付き添い、時に屋外を一緒に歩いたりなどの支援を行っている。お正月には、お二人の方に生け花をお願いした。傾聴ボランティアの方にも月に2回2名ずつ入っていただき、おしゃべりを楽しむ時間も提供できている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	テラスに花いっぱい運動を企画し、テラスや庭に野菜や花を育て、入所者とともに毎日の水やりを行うことで入所者が外気に触れる機会を設けた。また菜の花や桜、あじさいの季節には近くの公園や近隣のお宅まで全員をお連れしている。ご家族面会時に健軍商店街まで散歩されたり、短時間のドライブへの連れ出し等家族の協力を得ながら、感染状況見ながら外出の機会も増やしている。	近隣の公園や民家に咲いた花の見学などに出かけている。また協力医療機関を訪れた飾り馬見学への外出、「テラスに花いっぱい運動」として育てている花や野菜の水やり、成長を見る等外気浴を兼ねて支援している。また、運動を兼ねてユニット間の歩行に取り組まれる方もおられる。家族の中には面会時に地域商店街まで散歩に出たり、ドライブなどの協力があり、楽しい時間を過ごし帰園されている。	コロナ禍で活動が制限された事もあり、入居者が自ら「外に出たい」との要望は少ないようである。これから過ごしやすい季節に向かっており、入居者が外出を希望されるよう職員の働きかけに期待したい。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	現状では、ほとんどの入所者が金銭管理ができない状況にあるが、病院受診の帰りに職員とお土産を購入したり、バスに乗って運賃を払ったりなど代金支払いの支援も行った。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	携帯電話を所持している方もいっしょに、電話やメールを楽しまれている。充電が切れると家族が心配されることもあり、代わりに毎晩携帯電話の充電を職員がおこなっている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	ホール内は広く、開放的な空間を提供できていると考える。またホールには月ごとに季節感のある飾りつけを行い、なじみのある童謡唱歌や演歌のBGM、時には洋楽なども流れている。オープンキッチンから漂う料理の匂いやテラスに干した洗濯物なども自宅を思わせる生活感にあふれている。	テラスにはガーデニングが得意な職員が中心となり、入居者も一緒に関わりながら花や野菜を育てている。台所を中心に配置されたユニットでは、入居者同士や入居者と職員が穏やかに、時には賑やかな時間を過ごされている。音楽も入居者の得意や趣味なことなども取り入れながら童謡ばかりではなく、A BCの歌や洋楽なども流している。また、100歳を過ぎられた方のハーモニカ演奏は入居者や職員、来訪者などにも元氣や安らぎを与えておられる。現在、面会は交流室を活用し、オープンな形で実施されている。	元旦には入居者個々が願い事を書いた絵馬の掲示や、その月に応じた飾り物など季節感に配慮されている。ホーム内は掃除や換気、必要な消毒などが継続されている。今後も入居者の不快になるような音や臭いなどに配慮しながら居心地の良い空間作りに取り組まれることを期待したい。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	テレビ前や日当たりのいい場所にソファを置き、一人で過ごせる場所と共有空間を区別し、状況にあった居場所の提供をしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室には家族の写真、使い慣れたドレッサーやソファ、毛布など馴染みのものを持ち込んでいただいている。また居室入口の飾り棚には季節の飾りのほか、自分の部屋だとわかるように写真を飾ったり、希望があれば居室前に名前を表示することもある。家族が持参されたお守りも仕舞い込まずに見える位置に設置するようにした。家族会の後には各居室にて家族との時間を過ごしていただくようにした。	入居時に馴染みの品を例を挙げながら説明するとともに、参考になるようになるように他の居室を案内し、趣味等を把握して家族に持参して貰っている。居室内や入口の飾り棚は家族の協力や職員のアイデアによりその方の趣味や特技、職歴が垣間見られ、自分の部屋との認識に繋げている。転倒防止のため低床ベットの他、ベッド横に布団を敷き入れる等安心して過ごせる住空間としている。	入居時の持ち込みはチェックをしているものの、貴重品の概念には個々に違いがあるとして、ノートが作成されており、更に家族及びホーム双方の安心につながると思われる。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	夜間起き上がりのある方はベッドを最低床にして、ベッド横の床の上に布団を敷き、ベッドから下りても安全に寝ることができるようにしている。また1本杖使用者にはテーブルの足に杖を保管するためのケースを設置したり、義歯洗浄の際には終了時間を書いた札を表示したり、不安や混乱のない環境作りに努めている。		